

人と人の意見はどうして食い違うのか？

人生の中でどうしても避けられないのが、人間関係です。

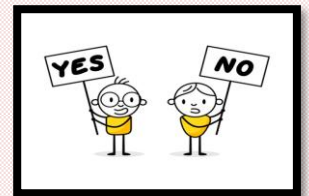
幼少期から家族とのかかわりがあり、学校に上がれば、先生や友だちとのかかわり、先輩・後輩とのかかわり、また恋人とのかかわりなどもでてくるかもしれません。さらに仕事を始めれば同僚や関係先とのかかわり、自分の家族を持てば・・・と挙げればキリはありません。

どうせ人とかかわるのであれば、嫌な思いはしたくないものです。

しかし、そう簡単にはいかないのも、人間関係です。

付き合いが長い家族とのあいだであっても、きっと何度かぶつかってきたはずで、

どうして人と人はぶつかり、お互いの意見は食い違うのでしょうか？



そんな人間関係を巡る難しさにおススメの落語を紹介します。



～たらちね～

八五郎が長屋の大家さんに呼ばれて行くと、縁談話があるという。

年は若く、器量よし、生まれよし、きれいなお嬢さんで、両親はすでに亡くなっているので、一人で屋敷奉公しているとのこと。おまけに夏冬の着物も揃えて持ってくるので、新しい着物も必要ないという。

八五郎は、そんなうま過ぎる話があるのだろうかど半信半疑で、「何か訳ありじゃないですか？」と聞いてみる。

大家は「いわば疵みたいなものがある」と言い、生まれがよいせいで、言葉遣いが丁寧過ぎるのだと言う。

それを聞いた八五郎は「丁寧過ぎるなんて良いじゃありませんか！」と言い、言葉が乱暴だと言われる自分とだったらちょうど良いと、縁談話を受けることになった。

思い立ったが吉日と、その日のうちに祝言を挙げることになる。

八五郎は、やって来た噂通りのきれいな嫁さんに大喜びしながら、名前を聞く。

嫁さんは「自らの姓名は、父はもと京都の産にして安藤、名は慶三、字を五光。母は千代女と申せしが、わが母三十三歳の折、ある夜丹頂の鶴の夢を見て妾を孕めるが故に、たらちねの胎内を出でしときは鶴女と申せしが、それは幼名、成長の後これを改め、清女と申しはべるなり」と述べる。

八五郎は、ずいぶん長い名前なんだなと勘違い。

翌朝、お嫁さんが朝食をつくろうと米を探し始めるが見つからない。

まだ寝ている八五郎に「わが君」と呼びかけると、八五郎もびっくりして跳び起きて、さすがにその呼び方は止めてくれと頼み込む。

用件を聞くと嫁さんは「しらげの在りかは、いずこなりや」と言うので、八五郎は「シラミはいないよ」と返したり「朝から白髪は探さなくていいよ」と言うが話は食い違うばかりで、何度もやり取りしてようやくお米の場所を探していることが分かって一安心。

やり取りに疲れてしまった八五郎はまた寝てしまって・・・。

嘶のオチは、ぜひ最後まで「たらちね」を聞いてみてもらえればと思います。

今回は普段あまり使い慣れない言葉があちこちで使われているので、調べてみると少し物知りになれるかもしれません。

この落語はお互いが使う言葉の違いから、かみ合わない会話のやり取りが展開するところに面白さがあります。生まれや育ちが違えば、言葉だけでなく、見聞きしてきた経験も違いますし、価値観だって違ってきます。そんな相手と意思疎通するのは簡単ではないということです。

さらに人は、当たり前ですが他人の人生を経験できないので、相手の立場になって考えることには限界があります。どうしても自分が生きてきた人生、今自分が置かれている環境からものごとを考えてしまいがちです。

今から約3年前、新型コロナウイルスが世の中に広がり、皆さんの生活が大きく影響を受けました。

最近では、未知だった新型コロナウイルスも多くの知識と経験が蓄積され、インフルエンザと同じような扱いにするかどうかとか、マスクは必要か不要かとか、これらに向けて議論がなされています。

そして、こういった議論の中でも、きっと意見はぶつかることでしょう。

まずは自分と異なる意見の人がいる、と認めるところから始めてみてはどうでしょうか。

総合相談室では、カウンセリングはじめ、さまざまなグループワークを通して、人間関係について一緒に考えたり、経験できるお手伝いをしています。

専任カウンセラー 後藤龍太

令和5年2月1日発行